

期 雪 積

書 告 報 行 山

信州大学山岳会

年を重ねるとともに短くなる日本の冬・・・

しかし

山は

心弱き者を寄せ付けぬ

風と雪に

凍てつく岩壁に

魅せられた者の

短く、儂い軌跡・・・

も・く・し" ♡

山行報告

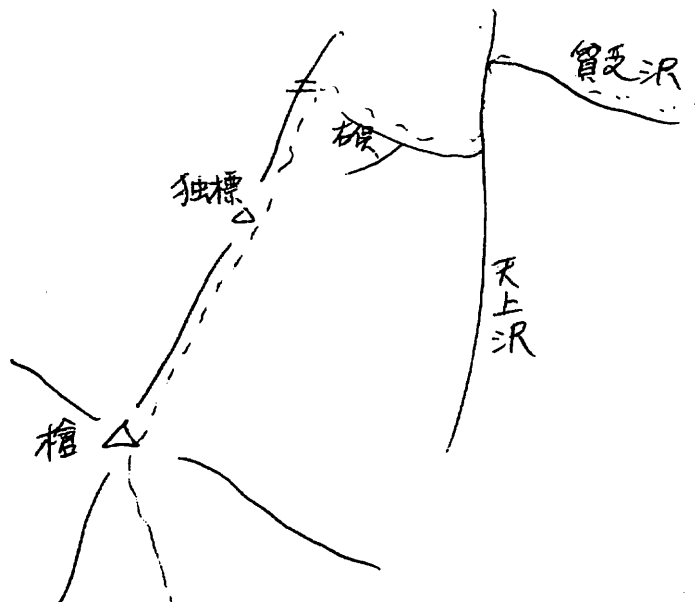
- 1~4 槍・北鎌尾根
5 美ヶ原
6,7 ハヶ岳西面
7,8 常念・虫巣
9,10 上高地S字状ルンゼ"
11~13 仙丈ヶ岳・地蔵尾根
14,15 戸隠P1尾根
16~19 後立山連峰縦走
20~22 南P・深南部
23 天狗原山
24 鹿島槍北壁
25,26 裏銀縦走

一年間の総括 27~33

雪崩講習会の感想・反省 34~37

メンバー： 片寄哲生(会4・織4) 大木信介(OB) 岩田不二江(部外者)

概念図



9/18(曇り) 松本＝中房温泉(6:40)～燕山荘(11:30)～大天荘 T.S(15:15)

早朝5時松本駅前で岩田さんと合流。山行期間中すべて雨との予報をうけて、湯俣入山、北鎌尾根末端からの取り付く計画を合戦尾根経由貧乏沢アプローチに変更する事を承諾してもらう。

中房は曇天にも関わらず、大勢の中高年登山者がたむろしていた。中には40人以上のツアーパーティーもいる。燕山荘までこれらのツアー客と一緒に思うとうんざりする。

岩田さんを先頭にして登り始める。合戦尾根は何度目だろう？ポンドさんと二人 30Kg ずつの歩荷。すれ違う度にお爺お婆連中から『重そうねえ、何Kgあるの？』と訊かれ、いちいち答えるのが面倒だった。『あと20～30若けりゃあなあ～』、かく言う親父が若くても背負えるとは思えなかったが、我々も30年後に同じセリフを吐いて若造に鼻で笑われたら顔に障るかと思うと、励ましてくれる親父もむげに出来ない。ポンドさん曰く『日ボ会(日本ポーター協会)を作ったら稼げるぞ』とのこと。

降りそうで降らない天気の中、いつの間にか燕山荘が目の前に。“足を動かしてりゃあ、いつかは着く”この言葉が好きだ。

道端にはブルーベリーの実が。これを紅茶に入れて飲むとすこぶる美味しい。登山とは“山の幸を嗜む”と書くべきかも・・・などと考える。

燕山荘からの快適な稜線歩きはコケモモの味と紅葉に色づいた尾根を愛でつつ進む。大天井岳の登りに入る頃から霧雨となり体が濡れていく。幸い本降りとなる前に大天荘到着。

9/19(雨のち晴れ) T.S 発(9:00)～貧乏沢取付(10:10)～天上沢合流(12:45)～～北鎌沢出合(13:20)～右俣のコル T.S(16:20)

昨夜遅くから吹き始めた暴風にテントを激しくたたかれ、何度も目を覚ましながら夜が明けた。風上側に寝ていたポンドさんは、フライがめくれたせいで雨が沁み込みシュラフごとビショ濡れ。強風と雨のためひとまず出発は見合わせることに。起きて早々フライの張り直しやら風で飛び散らかった物の回収に追われた。ポンドさんは当然動く気配すら見せない。ポンドさんに励まされながらフライを何とか直す。

朝のエッセンを手短に終え、岩田さんのいる小屋に避難する。昨夜の宿泊客はこの強風にも怯まず、雨の中すでに出発し、中は静かだ。小屋の中に凶々しく濡れたものを干して天候の安定を待つ。神経が図太いと、こういう時躊躇がないからいいもんだ。

9時前に青空が見えはじめたので出発。『貧乏沢入口』と書かれたプレートから藪のガレ沢に下り、登山道に毛が生えた程度の踏み跡を辿って下り始めた。昨夜の雨のせい、途中何箇所かで水が流れている。『貧乏沢』の「貧乏」とは水のことを指している訳ではなさそう。2時間弱で天井沢に抜けて1本立てる。

天井沢は右岸にきれいな踏跡がある。それを頼りに進んでしばらくして左岸に渡る。渡って間もなくが北鎌沢出合。初めての北鎌沢だったが、大天井岳の稜線から地形を確認しておいた上に、ケルンがたくさん積んであるので迷うこともない。

北鎌沢はハイステップの連続を強いられるような大岩の連なった急傾斜の登り。二俣となった所で目指す右俣の水が涸れていたのを計8Lの水を汲む。実はこの先かなり上部まで水が出ているのだが、気づきようもない。飲み溜めもしてはみたものの、この後の登りが長く全く無意味。飲んだ分汗になってしまった気がする。こういう無力さも登山の面白味かもしれない。

ハイステップのしんどい登りが続き、今度こそ水が涸れそうだと思い始めた辺りから、浮石と泥の混じった嫌らしい立ちこみを強いられる踏跡が続いた。北鎌沢は見た目より非常に歩きやすいのだが、この辺だけが注意を要する。しかもここから見えるコルはとても近いのに、実はまだかなり遠い。後続の二人を励ますつもりで、見当をつけ『あとたった50m アップスよ！』と言ってはみたものの、50アップどころじゃない。150はあっただろう。テン場に着く前から二人になじられる羽目になった。

ようやく着いたコルにはテン場が見当たらない。ポンドさんと二人テン場探しに奔走する(当然僕が上り)。下り方面にテン場発見との声を聞いて僕も合流する。3人テントを張るには十分なスペースだが、千丈沢側直下にキジ場が設けられており、風に漂ってくる臭いが若干気になる。北鎌は大所帯で来るべき場所ではないのだ。

9/20(曇り) 起床(4:00)~T.S 発(5:20)~独標基部(7:20)~

~槍ヶ岳山頂(13:00)~殺生ヒュッテ(14:20)

好天とは言えないものの、悲観する程悪くもない。ちょうど明るくなった頃に出発。

しばらく急登が続く。踏跡は明瞭で迷いようもないが、道が二通りある場合お客さん連れのため、どちらにすべきか迷う。ところで、この先槍の穂先までの間にテントサイト(2

人用サイズが限界)がまばらに登場するのだが、冬でないにしろ、風除けのない稜線的な北鎌尾根上の幕営は避けたい。テン場は概ね千丈沢側に面していることが多いのだ。

独標基部に着いて千丈沢側のトラバース開始。岩が突き出ている通過がいやらしい箇所があり、岩田さんのためにお助けを出す。槍山頂までしばしば難所と思われる部分は登場するけれども、岩歩きに慣れているパーティーならば無雪期においてロープを必要とする箇所はない。高齢者等を同行する場合でも所々のお助け設置と荷物を担いでやる配慮さえあれば問題ないだろう。

独標から北鎌平までは9割方千丈沢側のトラバースに終始する。力あるパーティーならば稜通しに歩き続ける方がおもしろいに違いない。独標以降は赤丸印・ケルンが時折見当たるので多少興ざめする。日本を代表するクラシックルートである北鎌に喧嘩を売っているとしか思えない。一級の稜線を二流のルートにする、ケルンと丸印の罪を重い。山をつまらなくする三悪、それは『丸印・鎖・梯子』ではないだろうか。槍穂の稜線然り、劔の稜線然りである。

今回は独標をトラバースした辺りから濃いガスと風に巻かれて、遙か先に槍ヶ岳を望みながら歩くという北鎌の真の醍醐味を味わえなかった。何度か地形図を開いてみたものの全く現在地がつかめないのだ。そのせいでもないが、ほんどさんがうんこしている間に一箇所だけルーファイを誤ってしまい、岩田さんに不必要な心配を抱かせてしまった。岩歩き、岩場のクライムダウンに慣れている人物、または単に学生の新人相手ならば多少のルーファイミスはすぐやり直しがきくが、高齢で不慣れな方を相手に先導する場合はちょっとしたルーファイミスがその後の行動に大きく影響を及ぼすものであることを知った。

独標以後、主に千丈沢側のトラバースが続く。昨日または最近の入山者と思われる踏み跡が残っている。あまり頼り過ぎると却って変な方へ導かれてしまう。それでもこれといった難所と言え、かぶったチムニーの乗っ越しとその後のクライムダウンのみ。フリーで登れば楽しい。

この後も、千丈沢側をトラバースしては稜線に戻るといった具合で、いつの間にやら北鎌平に到着。いつしか大きな岩の上を伝うガレ場歩きとなり、雲に突き上げるかのような岩峰が目前に現れる。弱点を探しつつ、一つ目のテラスまで上がった所でロープが必要となる。山靴のままリードし、ロープの流れの都合上、槍直下でピッチをきる。ここから左に進路をとれば簡単だったのだが、薄っかぶりの直上ラインにルートをとってしまったため少々苦勞する。本チャンにはあらざるべき、墜落停止を当てにしたランナーにカムを一つきめて乗っ越す。すると山頂の社と、10数人の一般登山者のギャラリーが視界に飛び込んできた。拍手と歓声に包まれた僕は英雄だった。記念写真を撮り出す人までいる。さすがに賽銭を投げってくれる人はいないのが悔しい。しかも、入目が気になって賽銭が盗めないで余計に悔しい。気分を入れ替えて残る二人の確保に入る。岩角ヒッチでセルフ・ランナーがとれる。岩田さんは若干苦勞したようだが、ポンドさんが後押しでサポートしたおかげで思ったより早く顔を覗かせた。これまた拍手喝采。山頂のギャラリーもまさか 60

代のご婦人が現れるとは想像できなかったようだ。岩田さんも得意満面！！登頂できて本当によかったと思える瞬間。よどんでいた空もこの時ばかりは雲を裂いて青空を垣間見せ、僕らに悪天を詫びているかのようでもあり、岩田さんの登頂を祝福しているようでもある。

ようやく長い北鎌尾根が終わり、ゆっくり登頂の余韻に浸りたかったが、風もあり寒い。名残惜しさに後ろ髪を引かれる思いで下山し始める。岩場の上りばかりが続いたせいも、鎖のある一般路にも関わらず下りが若干怖い。とりあえず無事に肩の小屋に到着。殺生ヒュッテまで下って山靴の紐を解いた。

9/21(曇りのち晴れ)

目を覚ましてみれば、外は雨。寒そうだ。小屋泊まりって本当に楽なものだと感慨一塩。

広い土間のテーブルで簡単な食事が終わる頃には雨も止み、念のためカッパを着て出発。

雪の全くない槍沢は初めてで、見たことのない地形ばかりだけに新鮮そのもの。今にも振ってきそうな槍ヶ岳付近の雲行きにも関わらず登ってくる中高年パーティーと何度もすれ違う。感心なものだ。中には“上高地から日本海まで”とドでかいロゴ入りのTシャツを来たパーティーまでいる。これまた感心して“すごいですね！！”と声をかけてみるが、単に着ているだけで槍ピストンとのこと。がっかり。小屋泊だとしても、日本海までやってみる気概のある中高年になりたいものだと思う。バカな高橋は今ごろ何処を彷徨っているのだろう。

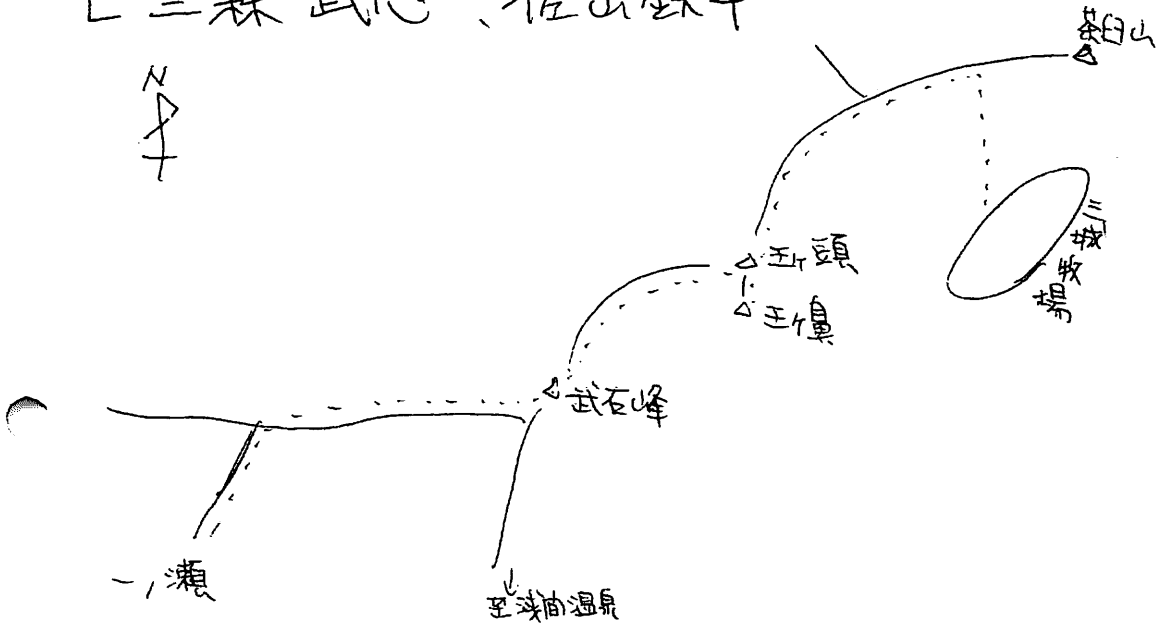
槍沢ロッジを過ぎると晴れだした。一ノ俣までははずだったが、二ノ俣の橋から見える風景に惹かれてしまい、岩田さんとはここで別れることに。ボンドさんと二人撮影開始。結果は上々。一ノ俣も軽くこなしてみる。下山後のよい思い出ができた。

“山を食す”と書いて登山と呼んでもよいなあ～。沢を遡って釣りをして、岩を登って景色を愛でて、山の上から世界を見渡す。そして世界の中心から愛を叫ぶのだ。そんな贅沢なルート取りをする登山を試してみたいものだ。

(以上)

美ヶ原

三森 武志、佐山 鉄平



1/22 (土) 快晴

7:30 一瀬発 → 9:50 烏帽子岩 → 14:00 武石峰 → 15:00 五頭手前T.S.

三才山ト礼近くの一瀬から入山。我々の他にも、トレーニング目的の人とかがいた。この日はド快晴で、乗鞍から後立まで見えた。ラッセルもほとんどなく、たまにあってはすねまでくだらした。途中会った人によると、夏なしかより、この時期の方がよほど鈴をつけていたほうがいいらしい。理由は「猟師さんにまちがえてうたれさから(笑)。大勢の人が車であがってアゼン。」

1/23 (日) 曇り

6:30 起床 → 7:20 五頭 → 7:40 五頭ホリ → 9:00 茶臼山・陣坂分岐 →

→ 10:40 三城牧場 = 松本

昨日とは違ってかゆくて曇り空、しかしガスってはいなかったため予定通りに行った。晴れていたならゴジマが丸見えなのに…。陣坂で予想外に深いラッセル、しかし下りなので速かった。昼前に下山して、ちょっとさようめい。

ゆざゆざ1泊で行くところでもなかった。1月は1泊2日しか山行組めないのがなかなか場所に困る。里山発掘でもしようかな。

11ヶ岳西面

⑭ 三森(山)、高橋、佐山

2/2 松本 ~ 美濃戸山荘 ~ 行者山やTS

雪、雪、雪、ふりつとる... 途中で「タダ」のよな音がしたが、わからずじまい

2/3 7:00発 ~ 10:10 硫黄岳 ~ 14:00 赤岳 ~ 15:00 行者山

昨日、たぶん降ったので、向をとるために縦走

2/4 6:40発 ~ 9:40 小同心クラック 取付 ~ 13:45 横岳 ~ 15:30 行者

やっと本来のクライミングに！ 登はん時向は3h45。

半分終わったくらいで「地吹雪」になり、痛い...

2/5 6:30発 ~ 7:45 赤岳主稜 登はん開始 ~ 10:15 稜線 ~ 11:35 行者

~ 14:00 11ヶ岳山荘 = 松本

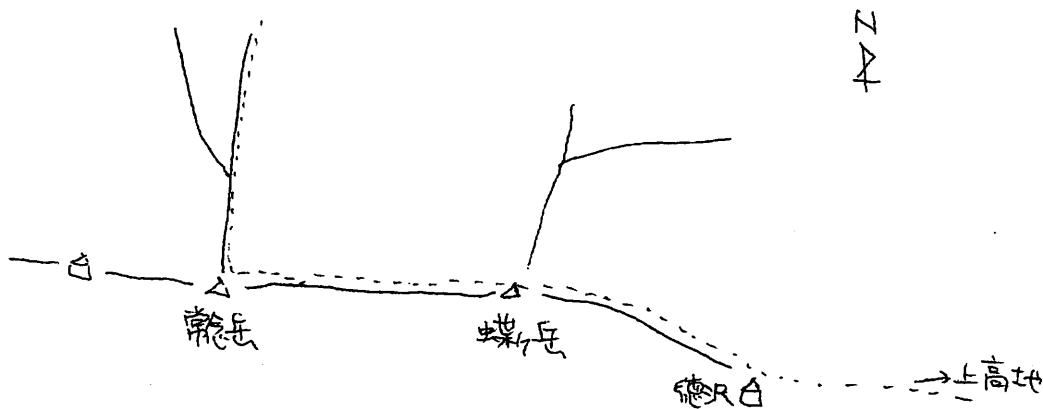
下山もあるので早めに出発。2h30のペースで抜け出した。

赤岳は登ったので「ちやちや」と下山。14:00に車に戻り。



常念・虫蝶

三森武志・佐山鉄平



3/2 (土) 晴山

8:30 須砂渡岨発 ~ 10:25 尾根取付 ~ 12:05 1596m 峠 ~
15:45 森林限界手前 T.S.

それなりのラッセルになるだろうと思っていたが、大して雪は多くなってサクサク進んだ。魔道ということもあって、1日で山頂まで行ける勢いだ。林道に~~木~~木たちがついていたり、スキー跡があたりしたので、たまに人が入っているようだった。それにしても予想外の速さだ……

3/3 (日) 晴れのち曇り

6:10 起床 ~ 8:00 発 ~ 10:10 常念 ~ 14:10 虫蝶 ~ 15:00 長堀山 ~
16:20 徳沢 ~ 18:15 上高地 T.S.

見事にぬぼーしてしまっただけで、あわてて出るのが、とくに日が上っていた。前日同様にペースが速く、夏と大差ないスピードで進む。常念・虫蝶の向のコルから先はトレースがついていた。三連休で入山したパーティーのつけたやつだろう。ありがたく使わせてもらい、目標を「今日下山!」とかがげつつ歩いた。しかし虫蝶についたあたりから天候が荒れてきて、何とか梓川まで下りてきたが、下でも吹雪が始まり、上高地に着いたとうとうずくがなくなり、幕営することになった。朝の寝坊が悔やまれる。

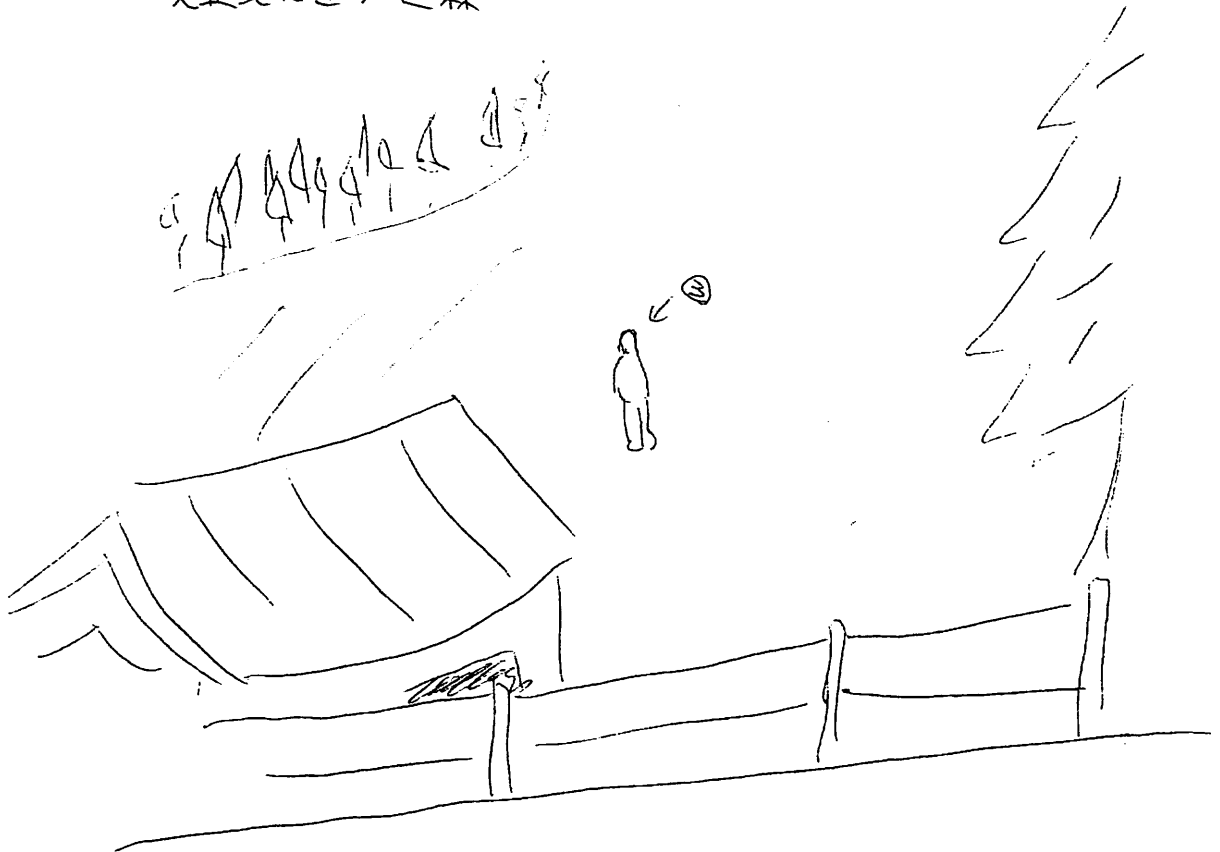
2/14(月) 晴れ。

6:00 起床 ~ 7:40 発 ~ 10:00 中1湯 = 松本

残りは林道のみだったので、のんびりと出る。晴れのせいか、連休を避けてきたのか。下山する我々は何十人もの上高地にむかう人達とすれ違った。平日なのにすごい人数。さすが上高地。中1湯でタクシーのおちの乗ってけうがコルをかれしつ、片寄かーにて帰木した。

初めて入山する山域は、どうにも積雪状況がつかみきれず、ついつい長めの計画になってしまう。

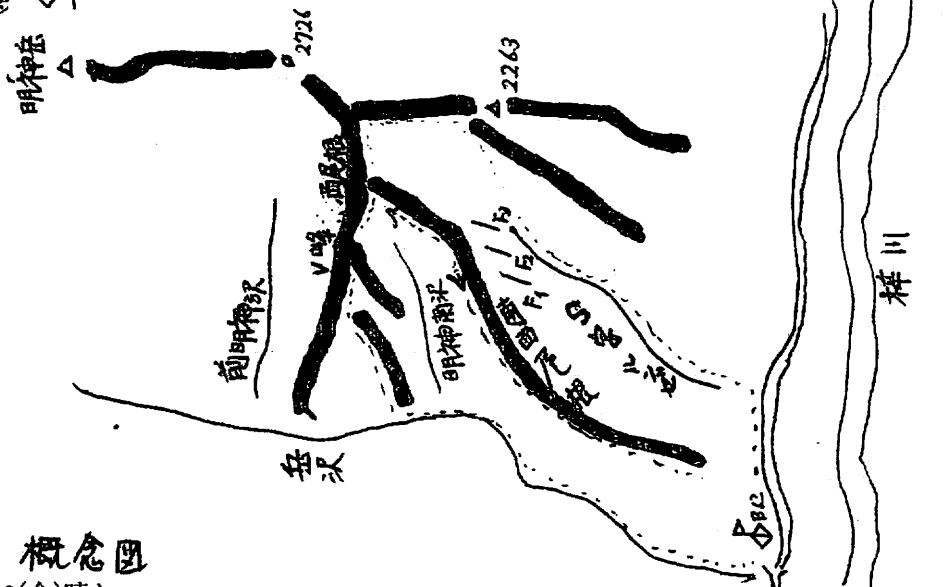
大正池に立つ 三森



上高地 S 字状ルンゼ (明神南面の氷柱) 2/18~19

メンバー：片寄哲生(4年)、大木信介(学士)

標 4+



概念図

2/18(金)晴れ

BOX(7:00)~中ノ湯発(10:00)~岳沢出合 B.C(13:00)~S 字氷柱基部(15:00)~B.C(16:30)

終電で来松したポンドさんのためのんびりと離松。

中ノ湯に着くと、韓国人登山客が地図を広げながら行き先に困っている様子。メンバーの一人は韓流花谷さんと言ってよいくらいウリ二つ。おのずと親近感が湧く

聞けば、槍沢だとか涸沢だとか、現在雪崩発生中と言わんばかりのルート取りで山頂を目指すのだとか。よく見ると、彼らが広げている地図は夏のエアリア!? ポンドさんからトワソンの逸話を聞いて描いていた韓国人像が、ますますエクストリーム化していく。

『氷河期に涸れた日本海を真っ先に渡りだしたのは彼らのご先祖様に違いない!!』

こんな仮説が頭の端をよぎる。

そんな僕を尻目に、親切な日本人を装い英語でペラペラと説明を始めるポンドさん。

その間ガッシャに次々と団装を詰め込こんでいく僕には一瞥もくれない。さすがだ。

説明が終わる頃には全ての団装がマイ・ガッシャに納まってしまった。

『この韓国人達は目の前の男の、親切の裏に隠された旧日本軍的計算高さを見抜いているだろうか?』 30Kg 程度のザックを背負いつつ、僕の心は植民地支配の歴史を飛んでいた。

話がそれた。

いざ中の湯を出発。

岳沢入り口までの道のりを、写真を撮ったり、その他の氷を遠望しながら歩く。

やたら暖かいので氷の安否が気になる。厳冬期だと言うのに、雪が少ないのも気になる。

岳沢に着いて、目的の氷の偵察をするため再度出発する。

ここから先のことについてはまだ秘密です。ごめんなさい。

2/19(土) 小雪

B.C 発(7:00)～明神南面の氷柱(9:00)～B.C(13:00)

昨夜降雪があったため、臆病な片寄がルンゼに入ることに断固反対。ボンドさんも承諾してくれ、明神の氷を登りに行くことにする。

岳沢からならアプローチ 10 分というのが魅力だ。

暖かいのが気がかりだったが、氷柱はあった。さっそく取り付く。

片寄がリードを試みるがバーチカル部分に入ったところで全く手応えがなく、力量外だと判断してボンドさんに代わってもらう。

ボンドさんがしばらくのトライの後、終了点代わりの灌木に到着。

フォローで登ってみてもかなり厳しい。しかも核心部には横一文字の亀裂がばっくりと開いていた。こんな状態では、もし冷え込んでいたら危険だったかもしれない。

たった一本の氷を登っただけなのに疲れ果ててしまった。

明日もう一日あるので周辺の氷を登ってから帰ろうという話にして、B.C でゆるりとしたひと時をすごした。

2/20(日) 晴れ

霞沢岳西尾根の氷を登るはずが、いつの間にか通り過ぎてしまったようで、U ターンする気も起こらないまま結局帰ることに決定。日曜のせいだろう、どんどん人が登ってきた。

《おまけ》今年登った氷

- ・ 上州相沢の氷柱、仔犬殺しの滝、立岩 3 ルンゼ、八ヶ岳南沢大滝
- ・ 上高地明神岳南面の氷柱(失敗)

今年も上州にたくさん通った。あそこは何べん行ってもよいところだと思う。氷がまだまだいくらでも隠されている。こんにゃくやら野菜やら、土地のものを味わうにも暖かい場所だ。温暖化しちゃったら日本では氷が登れなくなるんだらうなあ。そうだ！これからはチャリ山行の季節なり！

※ 上州情報

大きい声で言うと言問題ありそうなので、ひっそりと紹介。

上州の道の駅には道路情報や観光スポットの案内を得られる部屋がある。道の駅に軒を連ねる店が閉まり始める時間以後ならば、その中で寝ることもできる。明りもあり、広く暖かい(暖房は付いていない)。ただ問題が一つある。

寝返りをうっただけで反応して点いてしまう自動照明のため、ほぼ一晩中明るいこと。加えて観光案内のビデオがオールリピートで一晩中続くこと。

ちょうど耳障りな音量なのが厄介だ。

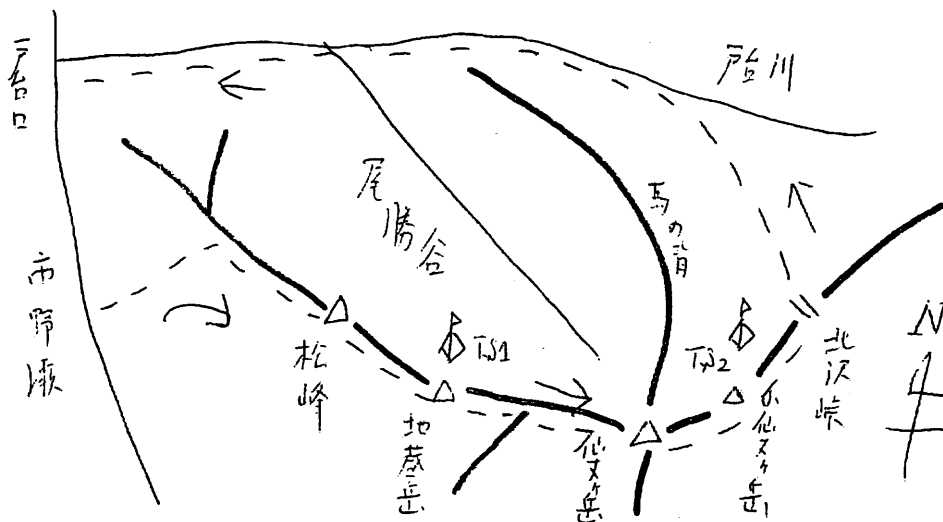
これらを我慢しさえすれば非常に快適な夜が過ごせます。

買出しも富岡方面に車を走らせれば、お安い食材が手に入ります。

春よ来い

仙丈ヶ岳・地蔵尾根 2/22~24

L高橋昭彦 (2) 三森武志 (3) 片岡陽介 (1) 佐山鉄平 (1)



今年はGWの自転車山行、夏の日本アルプス縦断と我ながら頭のイカれた山行を仙丈ヶ岳、しかもあえて人気の無い地蔵尾根で行ってきた。それだったらオールシーズン（無雪期、積雪期、残雪期）地蔵尾根から仙丈ヶ岳という、非常に無意味でどこぞの売名行為登山家がやりそうな肩書きを求めてしまうのが人の情である。

まあ形式上の理由はそんなものだが、結局登りたい理由は山を見て登りたいと思うから、ということに帰結する。何故なら僕は雪化粧をした仙丈を毎日見ているのだ。あんな美しいものを毎日見せられたら、欲求不満は募るばかり。据え膳食わねば男の恥である。そんな訳で信大山岳会マイナー尾根トレース部隊は今日も誰も行かない尾根に行くのであった。

2/22 6:10 伊那発~7:00 柏木~8:20 出発~13:20 松峰~16:50 地蔵岳 T.S

三森さんのとある事情で入山を一日遅らせる。日中には終わるようなので、前日のうちに伊那の高橋宅に移動しておいた。

当初の予定では市野瀬から出発予定だったが、笑っちゃう位雪が無いので柏木の登山口まで荷物を上げることにした。市野瀬に車を置きに戻り、急な林道を登り返す。5月の頃は新緑に萌えていたカラマツも文字通り落葉しきっていた。

柏木からは暫く林業用の林道を辿る。孝行猿の碑からは登山道に入るが雪は殆ど無い。雑木林や暗いヒノキ林の中を通過して再び林道と合流。明るく開けたカラマツ林の中で一本

取る。漸く雪が出始めたのでここでプラ靴を履く。今日は春山を思わせるような紺青の空で、木々の向こうには中アの山並みが見渡せた。この先は登山道沿いに雑木林の尾根に出て、三度林道と合流。まだ雪は硬くラッセルは無い。どうやら先日は2000m位の所まで雨だったようだ。この林道の終点辺りから漸くズボリ始めワカンを装着。

松峰は直登するが、ザクザクのモナカ雪で一気にスピードが落ちる。しかも普通のラッセルとは勝手が違うのもどかしいったらありゃしない。ここを越えるとカラマツからシラベの原生林へと変わる。夏の登山道のおかげでヤブに苦しめられることが無いのがせめてもの救いである。次のピークから松峰小屋への分岐までは風で雪が飛ばされていた。地藏岳へは再びモナカ雪のラッセル。結局この日は地藏岳の平坦な山頂をテン場とした。展望は無いが、木々の間から差し込む紅い夕日や、青白い月影が幻想的であった。

2/23 4:30起床～6:40出発～10:45 2422mコル～12:45 2736mコル～14:30
仙丈ヶ岳～16:00 小仙丈ヶ岳～17:00 2600 付近 T.S

越えられるものなら今日中に山頂を越えてしまおうと気合を入れて出発。風がかなり強いようで、頭上の樹林はうなりを上げている。尾根の北側は吹き溜まっているが、尾根上は風で飛ばされていた。樹林帯でこの風は去年の霞を彷彿させられた。始めはモナカ雪のラッセルだったが、漸く冬らしいラッセルになってきた。

三峰川の源頭である2422mコルは谷からの吹き上げが凄まじい。とりあえず稜線まで上がって様子を見ようと続行する。恒常的に風が強いせいなのか、この辺りからは林床がクラストしつつある。おかげで再びズボズボのラッセルになった。いつしかシラベの原生林はダケカンバの疎林に変わりハイマツも出てきたのでアイゼンワカン変える。春に苦しめられたハイマツのヤブは見事に雪の下である。

2736mピークの辺りから森林限界は越えるが、風は強くなる一方。本格的な地吹雪になってきた。できることなら仙丈の西面を見たかったのだがこれでは仕方ない。風の合間を縫って山頂を目指した。馬の背からの尾根と合流すると風も幾分弱まってきた。山の障壁は偉大である。そんな訳でやっとこさ山頂に到着。こんな天気だったので、写真を撮ってさっさと下降に移る。

北沢峠までは晴れていれば全く問題は無いが、ホワイトアウトのおかげでコンパスと地形図と勘を頼りに慎重に下っていく。山が僕らを逃がしたくないのか、風は強まる一方で何度か吹っ飛ばされてしまった。小仙丈の下りでは強風のおかげで十数分身動きが取れなかった。風が弱まった隙を突いて、すかさず樹林帯に逃げ込む。漸く眼前に甲斐駒がその姿を現してくれた。丁度風が遮られるようになっている大滝の頭の少し上にテントを張る。ちなみに今日の強風は春一番だったようだ。通りであの風の割に暖かかったわけだ。

夕方から晴れてきたおかげで今宵も幻想的な月夜であった。

2/24 6:00起床～8:00発～9:30北沢峠～10:50丹溪山荘～13:25戸台大橋～15:00戸台口

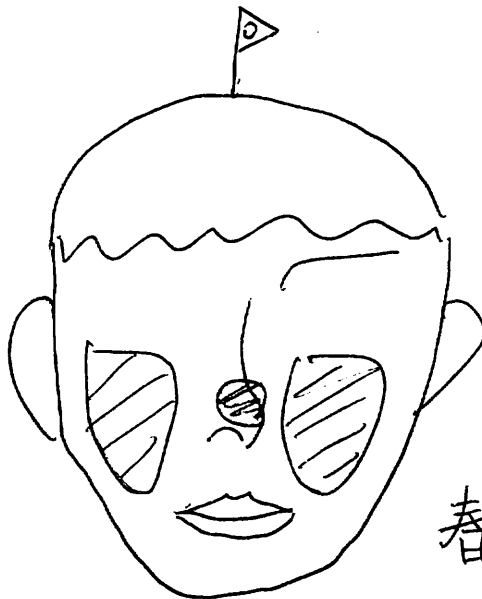
今日はもう下るだけなので遅めに出発。途中で峠から登ってきたパーティーとすれ違う。地藏から来たと言ったら、アホだこいつらという目で見られた。

北沢峠から先は赤布もトレースもしっかり付いている。雪は見る見るうちに減っていき、丹溪山荘の辺りには殆ど残っていなかった。その後は延々と河原歩き。徐々に曇っていく空のように気分は沈んでいく。南部に比べればましとはいえ、いつ歩いても南アの林道は果てしなく続いていくような絶望感を感じる。しかも戸台口を目前にして、土砂崩れで迂回を余儀なくされた。戸台口に荷物を置き、市野瀬の車を回収して終了した。

かくして地藏尾根オールシーズン登頂は達成されました。これも皆様のおかげであります。下山してから毎日仙丈を見ては、あそこに登ったんだ～と自己満足に浸っております。やはり家から見える山の良さはこういったところにありますね。ただ二日目に展望が利かなかったのは本当に残念です。うちから見えるかっこいいラインを観察したかったんですけど。まあ今後も仙丈に通おうと思います。今度は小太郎尾根につなげてそのまま白峰南嶺とか。それとも力を付けて尾勝谷や岳沢なんてのも楽しそうですね。大仙丈から西へ伸びる尾根もそそられます(多分なるいけど)。

文責 高橋昭彦

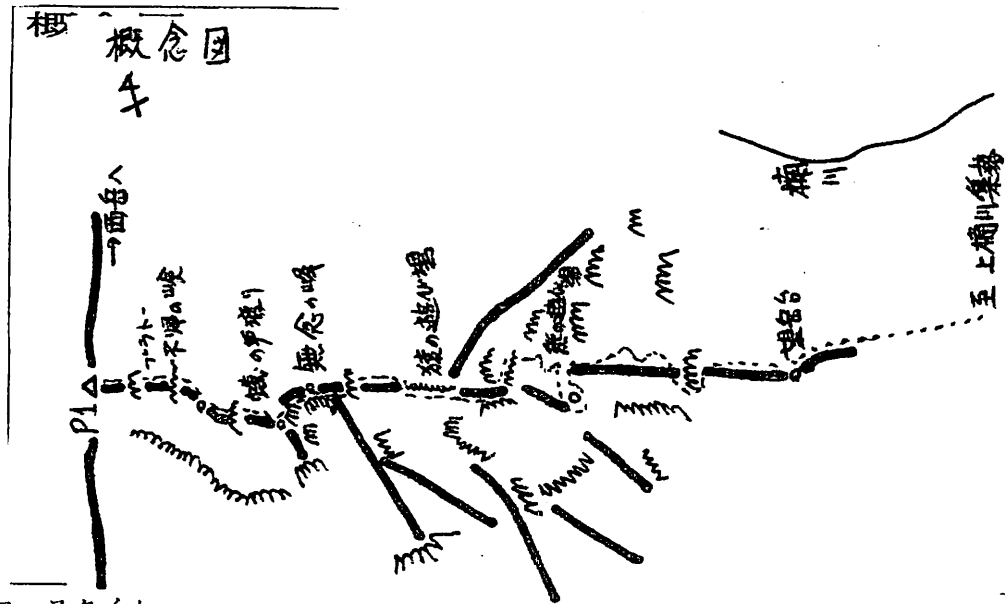
HAHA.T



春一番に
ヤラシタ...
by ③

戸隠西岳 P1 尾根 2/28～3/1

メンバー： 片寄哲生(4年)、 三森武志(3年)



コースタイム

2/28(月) 快晴

Box(4:00)～上楠川公民館(8:00)～P1 台地(11:00)～無念の峰(15:00～イグラー作り～17:00)

駐車場としか思えない場所に着いたのはいいが、除雪車が雪を河に落とすポイントに使われているようだ。入山中の降雪があった場合の車の運命を危惧しつつ出発。

このところ目立った降雪はなく、むしろ春めいた天気が続いていたためだろうか？林道は凍み雪状態で非常に歩きやすい。ワカンもいらなくらいだ。ところが天気が良すぎて今度は雪が腐り始めた。若干ペースが落ちてきた頃に B.C 設営予定の P1 台地に到着する。

特徴的な積雪で知られる戸隠に初入山ということで、初日は偵察のみに済ませるつもりだった。ところが天気快晴。雪も締まっている。これを逃す手はないということで、行けるところまで行くことにする。

膝下くらいのラッセルをこなしつつ高度を上げていく。

最初の岩場(夏では最初の鎖場)は張り付いた雪のせいで垂直気味になっている。立ちこんだら踏み抜くのでは？と恐る恐るしか上げようのない下半身に力をこめ、上半身では丈夫の雪をピッケルでくずし、上部に抜ける。

単調な尾根をラッセルの後、長い雪壁にぶつかる。熊の遊び場付近。この雪なら行けるだろ、と軽しく取り付いてから後悔した。雪壁を二段に分ける段差の辺りの体感傾斜はほぼ垂直。『雪は安定している。ステップさえしっかり刻めば大丈夫だ』と自分に言い聞かせる一方で、『でも万が一このステップ崩れたら背中から落ちるなあ～』などと、余計な想念が割り込んでくる。“ロープなんていらぬ”という自信があるくせに、ステップに立ちこむ度に脳天の奥底を冷たいものがよぎる所が空恐ろしくもあり、快感にも思われる。

ステップを切り疲れた果てにたどり着いた台地が、どうやら無念の峰直下の幕営適地らしいので、ここでイグルービークとする。二人がかりで2時間は要したが、なかは天井も高くとても快適。ツェットを張って防寒に努めて就寝。シュラフカバーだけのせいで伝わってくる底冷えが、明日なんとしても尾根取付きのB.Cまで帰ってぬくぬくと寝てやる！というやる気を喚起してくれる。

3/1(火) 曇り

夜中に積もった雪は完璧なパウダーで15cmくらいか。風はほとんどなく、雪崩を警戒しながら出発する。

B.Pからすぐで、一度目の懸垂点。夏はハシゴのかかる場所だ。灌木がないため、本番初のスノーバー懸垂を試みる。バッチリ！ 帰りが大変だという記述の通りだったので、このロープは残置していくことにした。

緩い斜面をラッセルしながら進むと、その都度新雪が両側の切れ落ちた奈落の底へと崩れていく。表層が薄いためと、下層の雪が安定しているため何ら不安はないものの、気持ちの良い光景とは言えない。

蟻の門渡りに差し掛かったところで始めてスタカット。蟻の門渡りよりも、その先の雪庇が張り出した雪壁の乗越し・第3雪壁の方が何倍も難しく激怖で、やむなくセットした支点はどれも本気モード。左足がアイゼンの前爪、右足は灌木に膝立ち状態で上部の雪をひたすら切り崩し続ける。やっとの思いで上部に抜け出た。

この先、傾斜のキツイ第4雪壁をスタカットで越えると、あとは単調な尾根のラッセルのみ。頂上に抜ける際、雪庇をシャベルで切り崩し満願の山頂に立つ。三森と握手する。

まだ時間が早いので、うまくすれば今日中に下山できる！しぜんと下降に熱が入る。

ところがそう簡単には進ませてもらえない。

核心は第3雪壁。支点になる自然物は全くないし、スノーバー類の残置もゴミを残すことになるので断固拒否。結局スノーポラードで懸垂することに決定。入念に踏み固めた雪の円柱にロープ用の溝を掘り、そこに沿わせたロープで懸垂下降する。行きとは違い、雪庇状の部分を越えていく形で懸垂したため、その間数mが空中懸垂だった。後発の三森談によれば、『雪がミシミシ言ってるのを聞いている方が怖い』とのこと。

トレースの付いた蟻の門渡りは最早怖くもなんともなく、ロープなしで通過。あっという間にB.Pに帰着。当然下山してしまうことに決定。

ここからの下降の方が、傾斜が強い上に、雪崩の不安が大きいので、慎重に懸垂を重ねることにした。5回の懸垂と計200mほどのスタカットで、昨日のトレースがうっすらと残る安全圏に到達。残る尾根を惰性気味に歩いてB.Cに到着。重たいから残置していったビールでひとまず乾杯する。行動直後に冷え切ったビールがうまい！

たっぷり休んでから撤収。

往路を辿って駐車場に到着したのはまだ日暮れ前だった。

後立山連峰縦走

L. 三森、高橋

2005年3月6日 快晴

松本 = 6:20 二股発 ~ 8:50 猿倉 ~ 12:05 小日向のユル ~
14:25 樺平T.S.

雲1つないトピカン、スキー靴の上を歩いていく。が、あまりの暑さと照り返しに1本がかれく、ケモ1の足跡しかない猿倉台地を過ぎ、^目駒のユルへの急登を登る。さすがに初日だけあって荷物が重い。ユルから先になると、強い日射で重くなった雪がまとわりついて、よけいに体力を奪われる。しかし早々にTSに着き、明日もラッセル、早めに帰る。

3月7日 快晴

6:40 発 ~ 8:45 J.P. ~ 10:05 杓子岳 ~ 11:10 白馬金鐘岳 ~
13:00 天狗の頭 ~ 15:05 天狗の大下り途中 T.S.

今日も今日とて風1つない快晴、あ、あ、い……。標高があかひに700、少しずつ涼しくなり、重さも速くなってくる。J.P. からPゼンをはき、稜線へのラストの登り。所々、悪いところを北側から巻きながら登る。稜線に出ると風が強くはたか、日本海が見えるほどの晴天具合。まさに稜線散歩、気持ちよくなる。白馬金鐘の手前で風に雪が混じりはじめ、地吹雪、ほかになってくる。おめめはちりの私はここでゴーグルをつける。高橋は全然大丈夫だという、なんで？

今日の目標、天狗の頭を越え、大下りの手前でテニ場を探す。結果、大下りの途中の雪庇っぽいところに雪壁つくって幕営した。

3月8日 地吹雪

4:00 起 ~ 8:45 発 ~ 9:20 最低コル ~ 10:05 P1 ~ 12:20

P2 北峰 ~ 13:30 唐松岳 ~ 14:05 唐松山荘 T.S.

朝から地吹雪、メシを食ってから、少し様子を見ることにした。変りはないが、明かかったので行けるとこまで行こうということを出発した。ゴーグルをつけていたが、風雪ですぐに使いものにならなくなってしまった。最低コルを過ぎ、P1に着いたぐらいで、目になにか当たったらしく、右目が激しく痛んだ。片目では距離感がわからず、ルーフアイではとたんに役立たずになってしまった。ルーフアイを高橋にまかせ、ラッセルなどをがんばる。P1の下りで手まどらた他は特に向題なく夏道沿いにP2 Nに出られた。そこからピークまでは1時間くらいだったが、歩けども歩けども景色が変りず、何時間も歩いている気分になった。山荘まででも冷や冷やしながらいり、何とか小屋に到着する。14時とまだ少し時間はあったが、目のこと、精神的にかなり消耗したのでここで幕営。

3月9日 快晴

4:30 起 ~ 7:30 発 ~ 10:30 五竜山荘 ~ 11:55 五竜岳 ~

14:15 北尾根の頭 ~ 15:00 D1 沢のコル ~ 16:20 キレット小屋 T.S.

起きたら雪でテントがつぶされそうだったので除雪してからエッセンをした。おかげで出発が遅れてしまった。出発してすぐはまた少しがらついていてゆううつにさせたが、10分も歩くと全て晴れ、南部のほうまでまる見えになった。

任一！ やたぜ!! 気合いも入り、足取りも軽くなる。しかし周のほうは相変わらず強いまま、ときおり吹く突風に耐えねばならず、思ったよりも歩みは遅い。しかし鎖付きの岩稜を~~通~~通りすぎ、平坦になったところでスピードもあがり、五竜山荘には夏と変わらぬくらいで着けた。そしていよいよ五竜、ここを過ぎると、逃げるのが難しくなってくる。予備はまだ1日も使っていない。気を引き締めて出発した。

五竜~~まで~~までは特に向題なし、急登にあえきながら登った。山頂に立つと、ここまで来た白馬、唐松が見え、先には鹿島槍、剣が見えていた。美しい双耳峰を見て、知らず気合が入る。

五竜からの下りはかなりの急登、あまりの急さに、晴れていても上からは近づかないと見えなかった。ガスっていたらかなり危ない所だ。下りきるとすぐG4、G5のアップダウン。マークを追いながら進む、岩稜を抜け、北尾根の頭に出た。あとはひたすら歩くだけだった。日が傾きはじめ、だんだんと景色が赤く染まり、ゆく、さすがにこれほど長距離を1日で歩いたのは冬は2人ともはじめてだったため、疲れが出はじめた。それでも何とか池心前にキルト小屋に着き、気分良く幕営。実に快眠であった。

3月10日 快晴

7:00 巻 ~ 9:35 鹿島槍北峰 ~ 10:25 南山峰 ~ 11:40 冷池山荘
~ 13:30 高千穂平 ~ 14:30 西保出合 ~ 16:00 鹿島山荘 = 松本

今日も快晴、北壁を見ながらの撤収作業。11峰キルトの懸垂点までは夏道の鎖をたどっていき、懸垂点には残置があったので、それを使いケンスイ、今山行、初のロープ。その後数ピッチ、ロープが出るという話だったが、何とか高橋の猛ラッセルにより、なして抜けた。

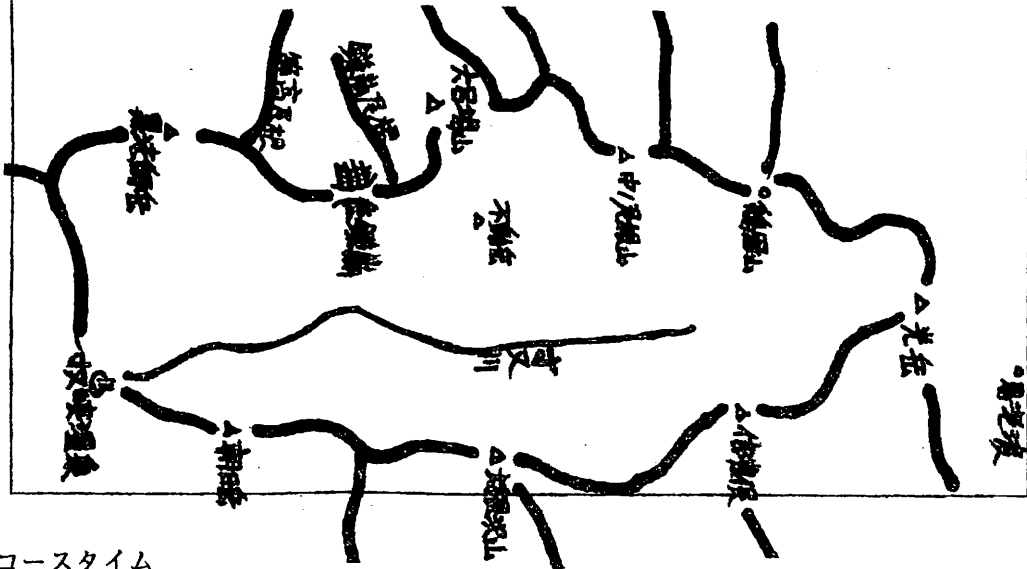
それからコルまでひたすら登る。気温が高いのか、なぜか所々でズボラ
コルに荷物を置いて北峰へ、天狗尾根と東尾根を見、次に南峰へ
向かう。今回の最後のピーク。近づくごとに気合が入る。南峰に着くと
待っていたかのような大天望。槍まで見えて感無量。

着いたのが早かったので、一気に松本まで帰ると!!と下山パワーが
噴火、駆け下りるように下りる。標高を下げると雪がダンゴになっ
て苦しんだが、それでも下山したいというパワーは収まらず、一気
に下りる。鹿島山荘のおばあちゃんに電話を借り松本へ帰る。

今回は是が非でも歩き通すつもりだったのに予備を多めにした
結果は実働もが5日で行け、予備も使わずに終わった。

天気が良かったのもそうだが、3日目の吹雪の中で行重したのが
一番大きかった。あれがなければ、下山次の日の寒波に閉じこめ
られて2沈はしただろう。その分相当な危険もはらんでいた
と思う。一度行重を始めると、行きたい気持ち先行して
中心、退く、ということができない。今回はそのことを通感
した良い山行だった。それにしても、行けて良かった!!

メンバー：片寄哲生(4年)、 片岡陽介(1年)



コースタイム

3/15(火) 晴れ 松本(8:00)~寸又峡温泉(17:00)

観光案内所の方に親切にさせていただく。軒下まで使わせてもらって、この日は野宿。

3/16(水) 快晴

温泉(4:30)~朝日岳(10:00)~三方峯(17:15)

腕時計の目覚ましごときで起きられるほど優秀な二人ではなかった。初日から寝坊。どろどろうどんを腹に流し込んで出発!

合地ボツという所の先でプラ靴に履き替える。中途半端に残った雪がいやらしい。それでも標高が上がるにつれ十分な雪が出てきたので、もう水の心配はいらない。ホッとする。

朝日岳到着までに意外と時間をかけてしまった。この先で苦勞しそうな予感がしてくる。この予想は的中した。

藪の具合は思っていた程ではないものの、長い。とにかく長い……。いつまで経っても三方峯に近づいた気がしない。今日で貯金を作らなくては、あとがきついというのに。

晴れているせいもあってか、エッセン用に上げた水をはがぶがぶ飲まねばとても体もたない。まさに春山といった感じ。

いい加減着くだろうと、日が暮れ始めた頃によりやく三方峯に到着した。

3/17(木) 曇りのち雨

T.S 発(6:25)~大根沢山(12:30)~幕営~13:30

間違いなく雨が降るということで早めの出発を心がけたつもりが……。

三方峯を越した頃から雨が降り出した。見る見るうちにびしょ濡れになる。低山で樹林帯とは言え、樹林が切れたところから吹き抜けてくる風が執拗に熱を奪っていく。

いい加減にしてくれ、と泣きそうになりながら大根沢山へ。

大根沢山から下降点を探すままに導かれた目印が畑薙ダム行きであることに気づき、大根沢山まで一旦 U ターンする。ところが、濡れの寒さで焦っているせいか下降点に確信を得られない。下り始めてしまえばしばらくテン場適地もないので、大根沢山で幕営とした。

空焚きして乾かしたいのは山々だが、この先のことを考えるとそうも行かない。ほんの少しだけでもいうことで、フライを滴った水を使って浮かしたガスで空焚きし、温まった。

3/18(金) 晴れ

T.S 発(6:30)～2107m(11:55)～サワラ沢山 T.S(15:00)

雨が止んだ。雨が止んだ。ただそれだけでうれしい！

風はまだ強めだが、晴れてさえいればむしろ服が乾きやすい。まさに恵みの風。

相変わらず支度の遅い片岡をおいて下降点を探していると、昨日見当を付けた辺りで赤テープを発見できた。これだ！とばかり下降を始める。

ところが、出鼻を挫かれるとはまさにこのことだろう。行けども行けどもモナカ雪。昨日の雨で、今朝の風だから当然と言えば当然だなと納得しているそばからズボッ！！

今日は冬型だから、その内に晴れて昼頃にはましになるだろうと楽観的に考えて歩く。

しかし、これが希望的観測に過ぎなかったことを悟るのに、そう長くはかからなかった。空は一向に晴れないし、むしろ雪が降り出す始末。さすがに観念した。

悪いことは続くものようで、この日のコースはよりもよってアップダウンの連続。地形図を開けば、疲れるほどに全く進んでいない現実を突きつけられるばかり。一日も後半に入ってから空荷ラッセルでスピードアップを図るが、結局思い通りに進まない。サワラ沢山に着いたところで幕営とした。

3/19 (土) 晴れ

T.S 発(6:00)～百俣沢の頭(10:20)～光岳(12:30)～光小屋(13:30)

予定通りに進んでいたならば、今日は光岳の先から出発しているはずだった。なのに今いるのは二日目の幕営地として計画していた辺り。光岳の先に藪の核心・ルーファイの核心が控えていることから考えても、完走はもはや不可能に近い。車の回収を考えると、ここから引き返して寸又峡温泉に向かった方が楽だ。往路下山か…。

そんなことを考えながら朝を迎えてみると、空はこれでもかというくらい青い。この天気の中を陰気に引き返すなんて馬鹿だ！ 前進あるのみ！ フィーリングで方針転換し、さっそく光岳を目指して歩き出した。

雪は昨日とうってかわってキッチリ締まっている。しぜんペースも上がる。この調子ならばむしろ昼前後の腐れ雪歩きの心配をすべきだろう。実際、百俣沢の頭付近から一気に雪が腐り始めたおかげで、重たいワカンをはきずる羽目になった。

そんな苦勞は、樹林帯を抜けた JP 付近からの富士山の眺めを見た途端に吹き飛んだ。登

る気は全く湧かないけれども、あの神々しい姿を見るとやっぱり富士山は日本一の山なんだという気がしてくる。引き返さずに来てよかった。

荷物を置いてピストンに向かう。山頂展望台からは、この先進むはずだった道のりが見渡せた。寸又峡は遙か彼方だ。また、今度は夏に来てみるのも悪くないと思う。

せっかくなので真新しい光小屋に泊まってしまうことにする。冬の寒さでも木の香りが漂っていて心地よい小屋だ。

3/20 (日) 晴れ

光小屋発(5:10)～易老岳(7:20)～易老渡(10:25)

日射しで雪が腐る前に尾根に入ってしまうと考え、早発ちする。そのおかげもあって、夏道の走る谷間の中は快適の一語。後半戦のために残しておいたフィルムを使い切ろうと、シャッターを押しまくる。

だるい登りを終えて着いた易老岳は、ピークと呼ぶには寂しすぎる気がした。

のんびりしてから下降を開始する。赤布だらけの下降路に何の不安もない。

下り道にいい加減飽きてきた頃に易老渡到着。

着替えを済ませ、パッキングを整え、長い林道歩きに出発した。北又渡のところで釣り吉さんの車が拾ってくれたおかげで静岡県磐田までひとつ飛び。かの有名な大井川鉄道にも乗って寸又峡を目指すが、千頭駅で時間切れになってしまう。一泊して、翌朝のバスで寸又峡温泉に着く。寸又峡では、行きがけにお世話になった観光組合の方に挨拶すると、またお風呂に入れてくれた。感激の一言につきる。

人の温かい寸又峡に別れを告げ、寒い長野県への長い道りを走り始めた。

南ア深南部は北アのような険しさには欠けるけれども、人との出会いといった“旅”的な登山ができる場所だな、と思った。 またきっと来よう！

天狗原山山行報告

文責：佐山

日時：3/23

入山山域：北信、天狗原山ブナタテ尾根

メンバー：(PL) 佐山 鉄平 (理4会2)

三森 武志 (理2会4)

行動記録

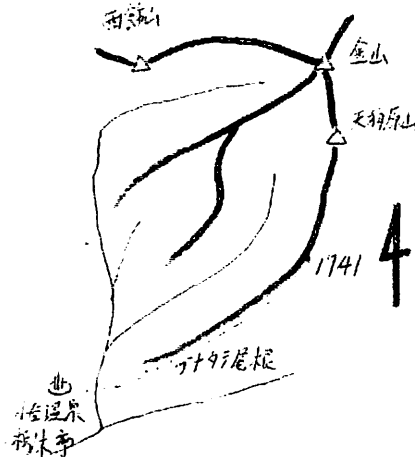
2:30 BOX 集合

4:30 栃ノ木亭着 (待機)

6:10 発

10:50 1471 ピーク先のコル (折り返し)

13:40 栃ノ木亭着

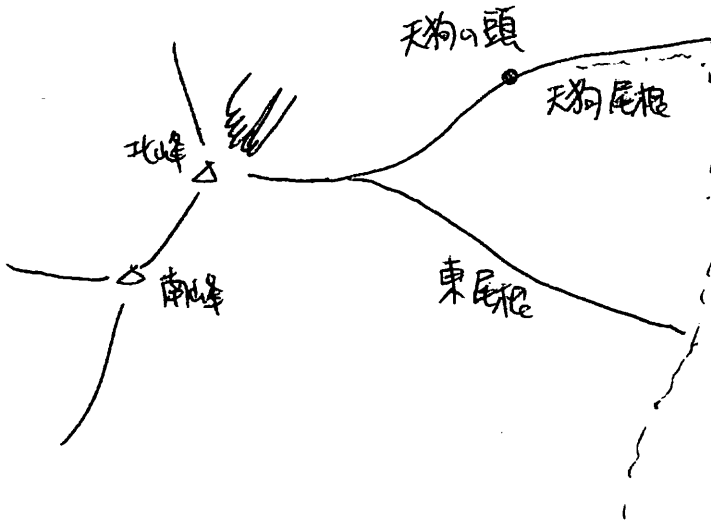


反省感想

入山予定日から天気が崩れる予報で日程をずらしても回復の見込みが無い為、日帰りに変更。二人ともスキーで入山した。林道に溜まった全層雪崩のデブリに足をとられながら尾根に取り付く。以後、11:00 をリミットにしてひたすら尾根をトレースする。1471 を超えたところでリミットとなり、雪も降り出してきた。天狗原山にはとどかなかったが、下山の準備をはじめて滑走下山・・・のはずだった。僕は、スキーはそれほど上手ではないが、これほどゲレンデと山スキーに差あるとは思っていなかった。斜面は波状にウネリ、木々の間隔は場所によっては人一人分。おっかなびっくり転げながらの下山となった。

“この調子ではスキーを武器に使うことはおろか、楽しむことすらままならない・・・”
今後の課題がさらに大きく膨らんだ山行となった。

メンバー：片寄 哲生、 高橋 昭彦



3/29 (火) 薄曇り

3月の終わりは休学期間の終わりでもあった。自分で思い描いた理想的なライン実現のために天候の安定を待つものの、季節の変わり目のせいだろう。一向に安定しない。結局時間的に北壁一本に狙いを定める他なくなってしまった。

狙いを定めたところで天気が味方してくれるはずもない。気象情報を聞いて乗り気しないまま出発する。

大谷原から荒沢の出合まではあっという間。河原歩きが楽しい。

荒沢を少し詰めてとりついた尾根の急登が堪える。木の幹まわりの雪は完全に春の相を呈している。

天狗尾根に合流し、歩き続ける。軽量化を図ったおかげで楽な一方、スピードを上げすぎて水分の消費が激しい。徐々に体がだるくなってくる。

所々のナイフリッジでロープを出す必要もなく軽快に第一クーロワール到着。ここもロープを出さずに越え、一本。

空を見渡すと、下界は晴れていそうな様子だが、この山の中は、今夜も雪が止みそうな気配はない。今日のビバーク予定地まで着くのは容易いが、明日カクネ里へ下降できるだろうか？まして北壁に取り付けるだろうか、と考え始めると切りがな。雪崩が怖い。なによりどれくらいの積雪で雪崩が発生するのか見当もつかない。明日は寒の戻りでもある。

結局、明日北壁に取り付けるのは危険と判断して、このまま往路を下降して帰ることに決めた。長い時間をチャンス待ちにあてたためと、休学最後の山行を敗退するのかという二つの理由で、下りのもと来た道を引き返す足はむしろ重たい。

荒沢出合に着くとほとんど気が抜けてしまった。行きとは打って変わって、だるいとか思えない河原を歩いた。松本に帰ったのはまだ明るい内だった。

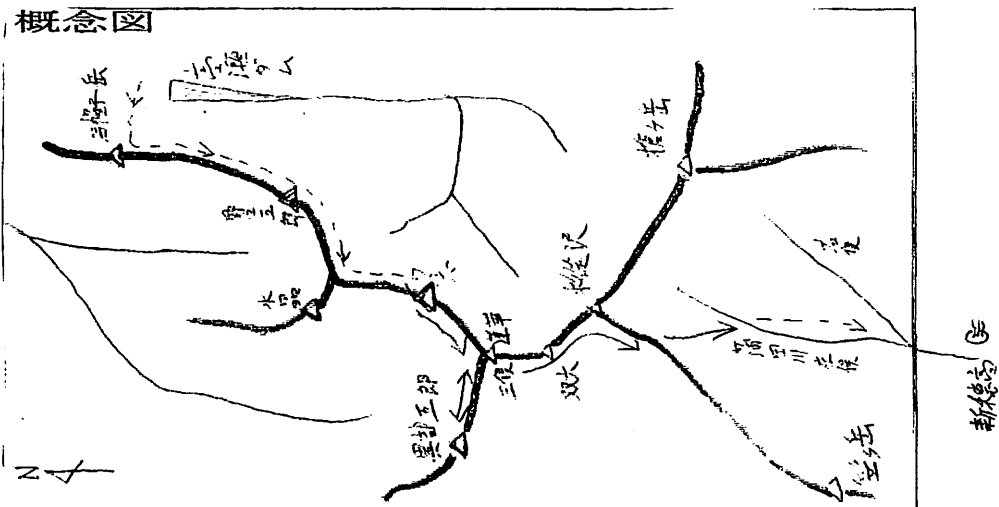
GW 北アルプス『鷲羽岳・黒部五郎岳』

4/29～5/2

メンバー：佐山 鉄平(PL) 三森 武志 片岡 陽介

行動記録

4/29	5:30	7:45	10:00	16:15			
	BOX	七倉ダム	ブナタテ尾根取り付き	烏帽子小屋 TS			
30	4:00	9:00	13:00				
	起床	野口五郎	水晶小屋 TS				
5/1	3:30	6:25	7:30	8:50	9:50	12:25	13:40
	起床	鷲羽岳	三俣小屋	三俣蓮華岳	黒部小屋	黒部五郎岳	黒部小屋 TS
2	5:00	8:35	10:20	11:05	15:30	18:10	
	起床	三俣蓮華岳	双六岳	双六小屋	新穂高温泉	BOX	



4/29

佐山(僕)の友人に七倉まで送ってもらい、いざ出発！！…とたんに雨が降ってくる。夕立のようなもので、取り付きに着く頃にはあがっていた。ブナタテ尾根の上部になって再び雨、ピッケルを持っている僕らの頭上で雷が唸っていた。ルートは特に問題なく、ワカンが重りとなっていた。烏帽子の冬期小屋は荷台や御座があり快適に過ごせた。

4/30

朝から快晴、雲ひとつない青空のもと裏銀座を行く。稜線上はほとんど夏道が出ていた。風も温かく、近づいてくる槍ヶ岳を見ながら穏やかに歩く。警戒していた水晶小屋への登りもサクサク通過した。このまま三俣まで行こうと考えていたが、僕が気分不良を理由に水晶小屋付近に幕営。穏やかな春の午後を満喫？した。

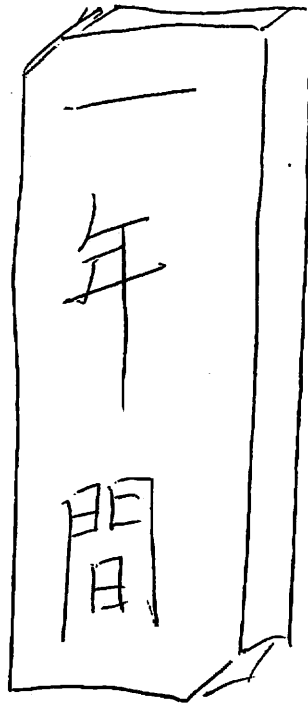
5/1

早めに起きて、一路、鷲羽へ。黒部、薬師、雲ノ平…北アの西は全てが雪に覆われていた。積雪量の違いが一目でわかる。昨日同様、夏道沿いに三俣小屋に到着。スキーヤーの姿もみられるようになってきた。三俣蓮華を超えて、黒部五郎小屋に着いた時には10人ほど人がいた。(全てスキーヤー)幕営装備を残置し、身軽になってメインの黒部五郎を目指す。途中、用心のためハーネスを着けるが、ロープ、お助け共に出さなかった。登頂したときには一面が真っ白・・・ガスの中である。僕らの他、4名のスキーヤーがいたが、彼ら(彼女ら)は何の迷いも無く滑走し始めた。凄いか無謀なのかは別にして、共に行動できないと強く思った。小屋に戻って設営準備、冬期小屋は満員だったようだ。雪壁を作り、フライを張り終えたころには雨が降ってきた。

5/2

小雨の中テントから出ると、昨日作ったはずの雪壁が消えていた。雨で溶けてしまったようである。そんな中、運命？の出会いが訪れた。松本在住、勤労者山岳会のスキーヤーである。彼は今日下山予定で、やはり新穂高に下りる予定だった。『新穂高で一緒だったら松本まで送っていきますよ』彼の一言だった。そして彼と僕らの鬼ごっこが始まった。三俣蓮華を再び超えて双六岳へ。時間だ経つにつれて天候も回復し、双六岳では太陽が眩しかった。アイゼンを脱いでシリセードを交えながら双六小屋に到着。小屋は営業していてテントが幾つも張ってあった。ここまではそれほど“彼”を気にしていなかったが、一本中に双六岳から滑ってくる彼の姿を見つけた瞬間、火がついた。弓折岳で追いつかれたれたら負けである。雪渓を滑るスキーに勝てるわけがない！！文字通り“逃げる”ようにして双六小屋を発つ。雪庇に注意しながら弓折岳に到着。軽く休んで後ろを振り向く、…少し離れたところに彼を見つける。ここから林道まで雪渓が続く。片や板で、片やケツで滑走する。……………負けた。林道に出る直前で抜かれてしまった。林道には雪が残っていたので歩けど歩けど彼の姿は見えない。「残念だったな」とかなんとか言いながら新穂高のバスターミナルに到着。そこには、風呂上りのさっぱりとした彼がいた。

文責：佐山



の

総

括

一年間を振り返って・・・ I robot ?

今ここに山岳会一年を終えた自分を気持ち幽体離脱で眺めて見ると、どうも納得いかない。終始上級生の言いなりになっていて主体性を持たないロボットのような気がする。故に正直楽しくなく、強制されているとさえも感じた。なんともったいない一年であったことか・・・それから山岳会の活動に限らず中途半端であったと思う。やりたいことがたくさんあることは自分でもいいことであると思うが、あちこちに手を伸ばしすぎて全てが中途半端になるのは馬鹿だ。本当にこのままでは薄っぺらな人間になりかねない。お前よ、一年だけは見逃してやる。だが、同じ事を二年も続けさせるわけにはいかない。この辺で自分の選択するものを絞っていかねばなるまい。二年目はそういう年にしようと思う。

まず上級生の言いなりにならないためには主体性を持つことが何より先決である。そして次に必要なのは上級生に頼らずに色んな事を自分でできる“力”である。そしてこれを培うものは主体性であるように思う。やはり全ては主体性に始まるのだ。

色んな事にチャレンジできる学年。色んな山行をしようと思う。そしてそれらを自分で計画し、自分でそれを遂行する楽しみを味わってみようと思う。

片岡 陽介

一年間

大学三年の春、『冬山に登ってみたい。』その目的のために山岳会に入会した。はじめの新人合宿には学科の都合で一日も参加できない為、五月の中旬に雪訓合宿が企画された。ピッケルストップがうまく出来ず、内心うんざりしていた事を覚えている。

それから約一年たった現在、山岳会を続けて行く意志が稀薄になっていることに改めて気がついている。夏の初め、夏の終わり、冬の初め、そして終わり。幾度となく辞めたくはなったが、まだ在籍している。

結果だけ見れば、ほとんど連れて行ってもらうという形であったが冬山を経験したのは事実。今後、どんな人生を歩んでも、登山を、そして冬山を楽しんでいこうと思う。自分のことが少しだけ分かった気がする一年間だった。

先輩がたには申し訳ないが、『上級生としての自覚』を持つとは思わない。誰かの手本になろうとも思っていない。ただ、ゆっくりでいいから確実に歩いて行こうと思っている。大学四年となる05年度、着の身着のまま歩きます。

佐山 鉄平

一年の総括と抱負

高橋昭彦

102。今年度の入山日数である。夏の縦走のお陰で昨年よりは増えたものの、やはり少なすぎるといのがこの数字に対する第一印象である。昨年よりもアグレッシブに山に向かっていた気になっていたが、数えてみるとやはりこの程度である。

今年の自分の山を二つに分けると、一つは4月から10月の日本アルプス縦断が終わるまで。そして、もう一つはそれから今まで、に大別される。

前半戦、合宿は天候不順で不完全燃焼だったが、熊の岩のような素晴らしいクライミングを体験することができた。個人山行においても気合を入れて計画を立て、その大半を実行できたと思う。特に前述の縦走では、自分が長年抱いていた憧れを実現することができた。

それに対して後半戦は不完全燃焼のまま終わってしまった。その最たるものが冬合宿で、今シーズンの冬はずっとそれを引きずって消極的なままだった。そのせいなのかどうかは分からないが、この冬の山行はどれも終了後の達成感が乏しかった。縦断の終了後、具体的な目標が見つからず、宙に浮いていたことは大きい。しかし、モチベーションの低下は結局の所、心の弱さに帰結する。上級生になってこんな反省を書くこと自体がそもそも間違っているのだが、もう一度心の強さを求めていきたい。

今年是一年間随分と好き放題やらせてもらった。これも片寄さんをはじめとするリーダー一部員やOBの方々のご協力があったからである。今年も今年で好き放題やりたいと思っているが、今度は後輩がそうできるような環境を作ることも重要だ。自分が登りまくると共に、会のことも考えることが今後僕にとって最大の課題といえよう。

もう一つの課題は山を見る眼を付けることだ。今年は登山道は嫌になるほど歩いたが、反面そこから外れた山行が少なかった。登山道から外れた山登りは、山を見てそこにルートを見出すことが重要である。まあ要するにもっと山に行かなきゃ…じゃなくて行きたいということだ。

冬合宿後にとあるOBから言われた通り、結局今年一年不完全燃焼に終わってしまった。冬合宿に続きつまらない報告で恥ずかしい限りである。しかし、仙丈で食らった春一番と、後立の風や冬剣は、僕の目を覚ましてくれた。来年こそは充実した一年だったと胸を張ってこの場に報告し、リーダーとしての抱負を書けるようにしたい。

昭彦 T

これからの山岳会 我々が残すべきもの

夏合宿の報告書であんな事を書いて多数の OB の方が不快な思いをなさったと思いますが、山岳会の現状を憂慮し暴走野郎高橋がまた懲りずにつらつら書きます。不快に思う方は読み飛ばしてくれて結構です。

さて、近年は大学山岳部員の減少が叫ばれて久しく、信大とて例外ではない。特に近年の部員減少と力の低下は著しい。世の中には 5.13、M9 を登る素晴らしいクライマーが大学山岳部から登場しているが、我々はそれには遠く及ばないどころか SAC を名乗ることすら恥ずかしいというのが現状である。

SAC 規約第 1 章の第 2 条「本会は登山の実践と山岳科学の研究を通じて、技術の向上を図り、あわせて会員相互の親睦と人間形成に資することを目的とする」(覚えてるかな?)。1 年次の冬合宿で佐藤さんがこれを持ち出して小尾を槍まで連れて行こうとした時、深い感銘を受けると共に、自分の浅はかさを思い知らされた。それから自分が目指すものの中にこの目的の実行が加わった。つまり、山を登ることや姿勢で他の会員に刺激を与え、自分もよい刺激を受けようとした。少なくとも今年の前半は誰にも負けなかった自信はある。しかし、今会を見渡してそれが実践できていたのかと言われると、深い疑問が残る。

今年は何度か若手の OB や東京方面のクライマーと登る機会があったが、いずれも非常に楽しく、よい刺激を沢山受けた。それは彼らが本気で山に向かう人達だからなのだと思う。日常においても物事に対して真剣な人からは感銘を受けるものだ。ところが、今の現役と登って (っても 4 人しかいないが) 同じ刺激を受けることは殆ど無い。SAC とは本来情熱を持って山に登る集団であるにも関わらず、である。若い OB と登ったり古い雑感を読むと、昔の SAC が如何に情熱に溢れる集団であったかが分かる。しかし、我々にどれほどの情熱があるだろうか。中には未だに我々はお互いに良い刺激を与え合っていると思込んでいるおめでたい人もいるようだが、そんなことは無い。少なくとも僕は今の現役と登って、本気クライマー達と登る時の楽しさや刺激を感じることは無い。

以前 ML でこれからの会の方向性について憂慮する投稿があった。

今後 SAC はどのような道を辿るのか。会の存続の為ならレベルを下げてでも部員を残すべきなのか。僕の答え、少なくとも僕がいるうちは否である。先日も OB と登る機会があったが、その時に僕は確信した。我々が残すべきものは信州大学山岳会という組織ではなく、山に本気で取り組む姿勢とその楽しさなのだ、ということ。

僕自身 SAC の意志と実力にどれほど近づいているかは分からない。しかし、こればかりは守っていきたいと思う。OB の方々には見守ると共に、時には現役の襟を糺すようにしていただくと助かります。

たつた.T.

この一年

オシの熱意は

消えちやいな!

また"また"

登ってやるぜ!!

三森

入部当初は思ってもみなかった山岳会主将を務めての一年間。

満足の行く結果を残せたとはいい難いが、決して悪くない一年間だった。

思い返せば、強力な上級生に支えられながら、また時に尻を叩かれながらの現役生活だった。卒業後も県内に残る先輩方に叱咤激励されつつ、ヒイヒイ言いながら駆け上ってきた。さながら、涸沢走りが4年間続いていたような気もする。

主将職を2年間に渡って勤め上げた佐藤さんの後継として、会を率いることになった当初は、温室育ちの軟弱でしかなかった気がする。繊維学部生という立場から、在松部員とは一線画した形で常に関わってきたせいだろう。

山岳会は登山をするサークルだけれども、その本質は登山を通じての人間関係を築くことにあるのだという。その意味を改めて考えさせられざるを得ない。まさに4年間の生活は山岳会の連中との付き合いそのもの、登山そのものだからだ。登山中に喧嘩するのも悪くないかもしれないが、俺たちはどうも下界でごちゃごちゃしていることが多すぎた。もっと山の中でぶつかってみてもよかったとも思う。涸沢や槍沢走りで煽られているのは一年だけだが、現役部員天地無用状態で春の涸沢を舞台に自分を煽ってみるのも悪くない。

今年度は後期を休学し打ち込んだにも関わらず、やたら宿題をたくさん残してしまった。

ナチュラルに(=人力で)、きれいなライン取りで(=不自然なルート取りをしない)、をモットーに立てた計画はどちらも天気の読みの甘さでお預けになってしまっている。冬合宿を完走できなかったのも記憶に新しい。

もう自分の登山をするしかない！！

おもしろく、自分でもうっとりするようなナチュラルさで、もう少しのあいだ、日本の山々を歩き、岩を攀じるのだ！！！！

雪山崩講習会に参加しての

反省・感想

これは2005年1月29・30日に行われた
雪山崩講習会に参加したときの
その後の反省・感想想である。

雪崩講習会に参加して

今まで横方向に並んで検索するほうが効率的だと思っていたが場合によっては縦方向に並んでの検索もいいことがある。雪崩斜面が狭い時などはもっぱら縦方向の検索が有効である。これは一人目が見逃した情報を次の人間がキャッチできることに利点がある。ただし我が会では部員が少ないためこの方法はとりにくいと考えられる。

ザックを捜索に持っていく。これは救出した後の処置などのため。しかし時と場合による。思いザックを背負っての捜索は到底できない。さらには処置以前に遭難者を早く見つけ出すことが先決である。そのため余分なものは持っていけない。だからといってザックの中身を必要なものだけに詰め替えることなどする時間はない。これも人数に余裕のあるときしかできなさそうだ。

下りながら雪崩れたところ、またその周辺的环境を観察する。これはすぐに逃げられるようにするため、または捜索に当たったの情報をなるべく多く手に入れるためである。また周囲の確認をするという行為自体が自分を落ち着かせようだからである。

ビーコンだけを頼りにしない。万が一雪崩の衝撃でビーコンが壊れていればビーコンだけでは確実に見つからない。遭難者から外れた物を見つけ出し、そこからゾンデを使って遭難者を探し当てるといった作業も必要になってくるだろう。ビーコンに気をとられていて雪面に出た遭難者（ビーコン故障）の体を見つけることすら逃してしまうかもしれない。とにかく周りを見渡すことが重要である。

二次雪崩が起こった際、救出道具は可能な限り回収して逃げる。再び捜索を開始できるようにするため。

救出した後の遭難者に対する処置についてはその場の判断に頼ることになるだろう。遭難者が一人だけなら掘り出してすぐに安全なところへ避難させられるが、二人、三人ともなると一人が見つかったも次を探し出さないといけない。呼吸ができるように顔だけ出して次の捜索に移る方がいいのか、完全に救出するかは遭難者を見てから判断するしかない。

片岡陽介

雪崩講習会 反省・感想

高橋昭彦

気付いた点

- ・今までプレ冬でやってきたビーコン捜索訓練はあくまでも宝探しだった。ビーコンを探すだけだったら下界で十分できる。
- ・山(状況)を見て雪崩るかどうかを判断するという視点を欠いていた。
- ・いくら文献を読んでも実際雪崩に会った人の体験談を詳細に聞いた方が参考になる。
- ・雪崩が発生してからどうするか予め会として決めておくべきことが少なすぎるように思える。
- ・山岳会以外の人と登ることも重要。他の登山者のやり方から自分たちの欠点が見えてくることがある。限られた面子でしか登らないと盲目になってしまう。
- ・前述のことに関連するが、雪崩にせよその他の遭難であったにせよ緊急時に対する想定が甘い。そして、コミュニケーションが不足している。

これらのことを受けて今後やるべきこと

- ・ビーコンの捜索方法はプレ冬前にマスターしておく。そして、合宿では実際の雪崩事故を想定した訓練を行う。特に今までの捜索訓練で欠いていたのは

ザックを担いで捜索に行くこと

遺留品の周辺捜索

二次雪崩の想定

ソンドーレンをしてから掘り出す

救出者をデブリから遠ざける

発見できなかった時、また消失店などのマーキング etc

特に二次雪崩に関しては入山前から対応を決めておく。

- ・事故の記憶はいくら立派な報告書を作成してもいつかは風化していくものだと思う。遭難の体験談は、大変だとは思いますが OB の方々から聞くべき。それが会における知識と経験を集積していくことだと思う。
- ・雪崩のハザードマップは是非とも欲しい。
- ・雪崩リスクマネジメントは全員買しましょう。
- ・冬山に行くには冬合宿前の訓練が少ない。多少は個人の楽しみを犠牲にしても冬合宿前、特に12月は冬合宿のために訓練をすべき(最近では雪が無いけど)。
- ・下界でも事故を想定した話し合いを持つべき。また、山・下界ともにもっとコミュニケーションを持つようにする。

感想

部外の人間と山での知見について云々するという経験はこれまでになかった。そのため、今まで気づけなかった過ちに気づけたことや、新しい発見があったことなど、学ぶべき点が多かった。

反省

たかだか2,3年山をかじったばかりの大学山岳部員が10人にも満たない環境でこれまであらゆる知識・技術を検討してきた。しかしこのような状況では、遅々とした進歩しか得られないことが身に沁みだ。

山岳センターの講習会なり、文登研なり、学生同士、クライマー同士で議論し合える機会には積極的に参加すべきであると思う。

課題と対策

- ・ 自分たちが行ってきた雪崩の想定条件は 地形の考慮・遺留物の探索など、搜索余りにも単純すぎる → に活用できる情報に気づけるよう訓練
 - ※ 雪崩の規模、地形、遭難者数、遺留物の有無、デブリの位置・・・想定されるケースは限りない。
- ・ 遭難、特に雪崩による遭難搜索に確実な安全というものはない。早く遭難現場に飛び込めばよいというものではない
↓
緊急の発見が要求されるにも関わらず、搜索開始前に行うべき2次遭難対策は山積み状態であるのが普通。まずは落ち着いて状況把握をすること
- ・ 搜索においては、埋没者を掘り起こした後の介助に必要な医療具等を積んだザックを携行する必要もある
- ・ 雪崩搜索三種の神器はすぐに取り出せる場所にないと話にならない。

編集後期

駆け足で作ったためにかなり雑になってしまった。反省〜。次は早めを作ります。

これをやっている最中にサトウカカシの新品、シングルロープが2本も届いたやった!! うれし〜です。

経費削減、うんうん 素晴らしい!

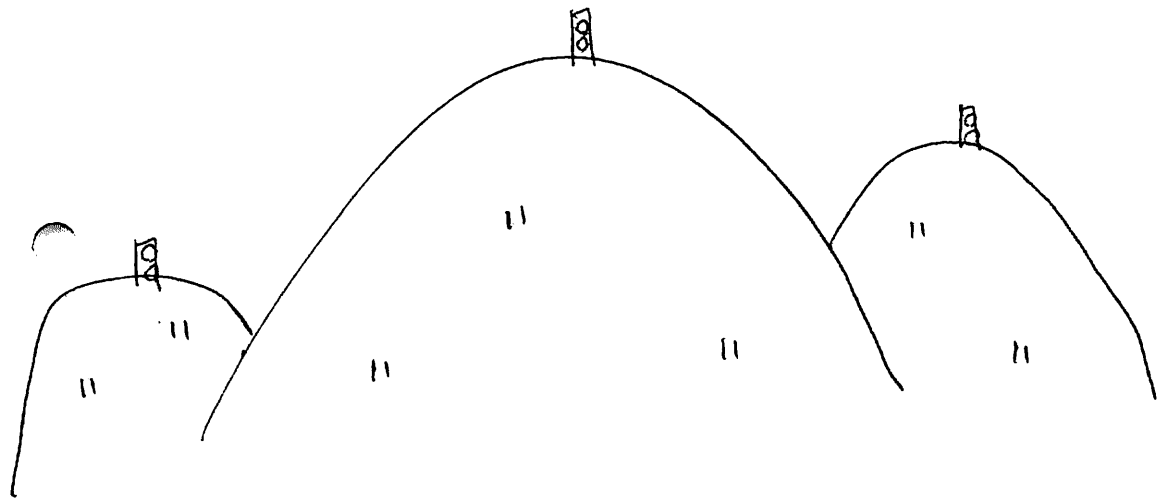
三森

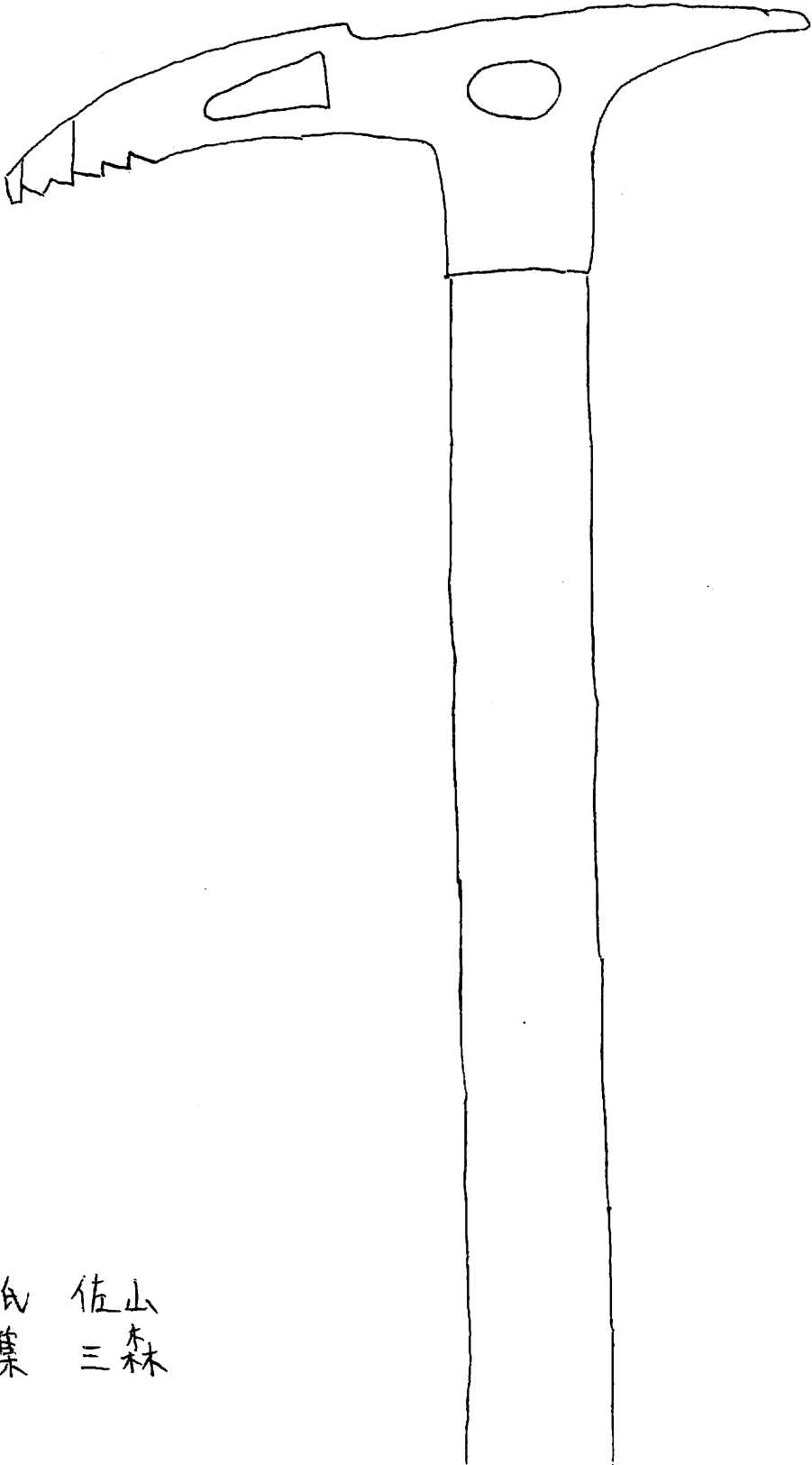
フロントで寝ていない日々が続いている...。シユラフ 様々：いいです。

佐山

今年は大くさん山に登ります。

長澤





表紙 佐山
編集 三林

SAC